

NO.279 英国にとっての連合参加 ～ 大英帝国と国の単位 ② ～

2019年11月18日

あおぞら投信株式会社

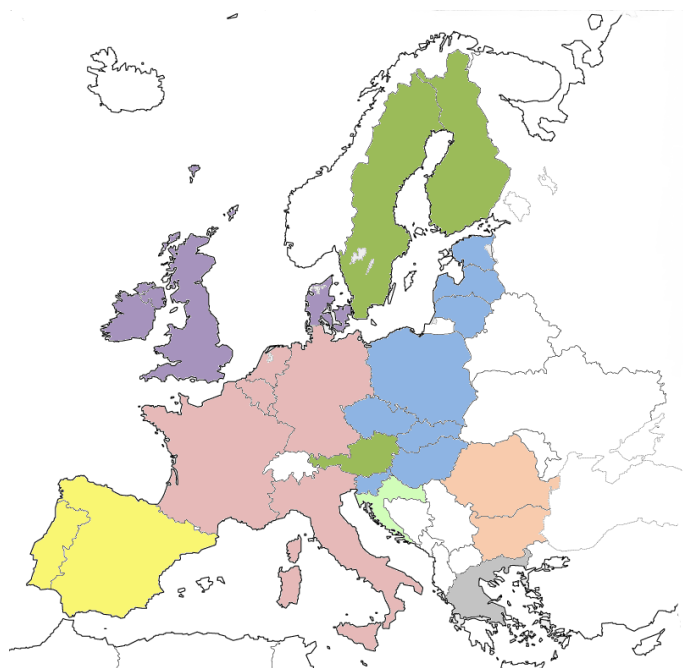
「我は行く 東インドに会社あり 7つの海を 繋げて今に」

現在も世界の各地域で連合を考える動きがあります。英国にとってはEU(欧州連合)との関係をどのように変化させていくかについて迷路に入っている状態です。ただし英国の歴史を見ると、1920年の国際連盟設立時に示した行動は、国際会議により、国際的な紛争危機の平和的な解決方法を示すことが出来る、という考え方に基づくものでした。国際連盟自体はウィルソン米大統領がリードしていたものですが、規約は英国政府が練ったものに基づいており、米国が議会の反対で加盟しなかったこともあり、主導権は英国とフランスが握っていたのです。その後は国際連合へと変化していく国際機関ですが、英国は外交的な決着を目指すリーダーであったと考えます。

そして現在のEUへと繋がる最初の欧州における地域連合は、1951年設立のECSC(欧州石炭鉄鋼共同体)です。フランス、ドイツ、イタリア、ベネルクス三国(ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ)の計6ヶ国でスタートしました。その後、1957年にEEC(欧州経済共同体)、EAEC(欧州原子力共同体)の設立を経て、1967年にEC(欧州共同体)という枠組みの中に3つの共同体を持つことになりました。1973年、EU拡大の始まりとして英国、アイルランド、デンマークが参加したのです。その後、スペイン、ポルトガルなどの参加によりさらにEUは拡大し、2013年のクロアチア加盟により現在の28ヶ国となりました。EUは経済的な統一を図り、さらに外交、安全保障など他地域との紛争に備えることが出来るメリットがあります。ただし、各国の負担の違いなど参加国にはデメリットを感じる部分もあって、英国にはBREXIT(EUからの離脱)という選択肢が登場したのです。これは、欧州大陸との関係を最優先させるのか、今一度7つの海との関係を再構築するのかという選択にも見えます。英国の歴史には外交の強さと変化対応の難しさを見ることができ、21世紀の世界の動きのヒントになると考えます。

柳谷俊郎

現在のEU加盟国(色付)と加盟年



加盟年	国名
1951年	フランス、ドイツ(加盟時:西ドイツ)、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ
1973年	英国、アイルランド、デンマーク
1981年	ギリシャ
1986年	スペイン、ポルトガル
1995年	オーストリア、フィンランド、スウェーデン
2004年	キプロス、チェコ、エストニア、ハンガリー、ラトビア、リトアニア、マルタ、ポーランド、スロバキア、スロベニア
2007年	ブルガリア、ルーマニア
2013年	クロアチア

※1951年はECSCへの加盟、1973年～1986年はECへの加盟、1995年以降はEUへの加盟。

出所: 外務省および各種情報を基にあおぞら投信が作成。

本資料は情報の提供を目的としており、何らかの行動を勧誘するものではありません。本資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。ここに示された意見などは、本資料作成日現在の当社の見解であり、事前の予告なしに変更される事もあります。投資信託の取得に当たっては、投資信託説明書(交付目論見書)等の内容を必ずご確認の上、ご自身でご判断ください。

商号: あおぞら投信株式会社 金融商品取引業者: 関東財務局長(金商)第2771号

加入協会: 一般社団法人投資信託協会 ホームページ・アドレス: <http://www.aozora-im.co.jp/>